カルネ村へようこそ～来訪者～

NEW WINDのN

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

カルネ村に、外から人がやってきたら、どんな反応になるかな？

という話です。

ゲストは、ゴブリンスレイヤー。

目次

第1話 …… 1
第2話 …… 8
第3話 …… 14
第4話 …… 20
最終話 …… 25

第1話

ここは、カルネ村。

かつては、リ・エスティーゼ王国に所属する小さな開拓村の一つに過ぎなかったが、紆余曲折があって、今はアインズ・ウール・ゴウン魔道国の領土となり、アインズ・ウール・ゴウン魔道王の庇護を受けて目覚ましい発展を遂げている村だ。もっともその規模はすでに村とは言えない程になっているのだが。

そして、あらゆる種族が平和的に共存するという魔道国の理念を体現している村でもある。なにしろこの村には、人間以外の種族も多数暮らしているのだから。

（今日もこの村は平和だなぁ）

住民達の穏やかな笑い声を台所で洗い物をしながら聞いていた少女のような若い女性エンリ・エモット――実は村長である――はそう思っていた。

住民同士の些細な喧嘩くらいはなくはないが、内容も深刻な問題ではない。食事の肉が一個多いとかそんなつまらない話だったりする。

だが。そんな平和はいつも突然破られるものだ。

「エンリの姉さん！　大変です！」

大声を上げながら扉を乱暴に開けて飛びこんできたのは、エンリが最初に呼び出したゴブリン達のリーダーであるジュゲムだった。多数いる人以外の住民の中では最古参となる。彼こそが、エンリが一番信頼をおくゴブリンと言えるだろう。

「どうしたんですか、ジュゲムさん。そんなに慌てて」

エンリは苦笑しながら出迎えた。急を報せる鐘も鳴っていないし、たぶん危険な話ではないだろうと判断したのだ。

「姐さん、そんなに落ち着いてる場合じゃねえんですよ。降ってきたんですよ、人が！」

エンリはジュゲムの言っている意味がわからずにポカンとした顔になる。

（聞き間違えでなければ、人が降って来たって聞こえたけど、そんなは

ずないよねー。あはは・・・私疲れてるのかな？）

寧ろ搾りカスのようになっているのは、彼女の配偶者の方だったりするのだが、彼女は気づいていないし、自分のせいとも思っていない。

「え、えっーと、雨が降ってきたの間違いかしら？」

ゴブリン天候予測士の情報では、今日から三日間は晴れ続きだったはずだ。この天候予測が外れることなど今までになかったし、もし外れて雨が降ったというのなら、ある意味大事件である。すっかり天候予測をあてにしている村人達は、誰も雨に備えていない。降ってきたとなると、大慌てで洗濯物を取り込んだり、天日干しにしている食物などをしまい込む必要がある。

「違いますよ、姐さん。雨は三日は降りませんぜ」

「だよねー、あはははは」

やはり聞き間違いでなければ、人が降ってくるという、そんな有り得ない事が起きたのは間違いないのだろう。

「ってのんびりしてる場合じゃないんですよ。いきなり村に人が降ってきたんですよ！　姐さん早く来てくだせぇ！」

「わかったわ。場所はどこですか？」

「案内しやす。着いてきてください」

ジュゲムはまたも勢いよく扉を開けて飛び出していく。

「あ、待ってよ！」

エンリは慌てて後を追って家を飛び出した。そのエンリの周りを赤い帽子のゴブリンが四人、一定距離を保ちながら付いてくる。護衛のレッドキャップスという強いゴブリン達だ。顔が怖いので、エンリはちょっと苦手にしているが、本人達には言えない。

ジュゲムに急かされ家から出たエンリは、カルネ村の広場に人――ほとんどがゴブリンだが――が集まっている事に気づき急ぎそちらへと向かっていく。

「族長だ！　族長が来てくれたぞ！」

最初に声を上げたのは小柄なゴブリン。彼はエンリが召喚したゴブリンではなく、近くのトブの大森林から逃げてきて仲間に加わった天然ゴブリン達の一人でアーグという。彼は他の天然ゴブリンより

頭もいいし、言葉も流暢に話せる。多分、彼はゴブリンよりも優秀なホブゴブリンだろうとンフィーレア達に考えられている。今は小柄だが、ホブゴブリンならば成長すると人間の大人くらいのサイズになる可能性もある。今のどこか気弱に見える彼からは想像できないが。

「族長…」

エンリはこのカルネ村の村長であるが、この村に住む大半の者は村長とは呼ばない。呼び名を列挙すると、族長・将軍・将軍閣下・閣下…というところだろうか。

…主に後ろ三つは、魔道国が建国される前に起きたリ・エスティーゼ王国第一王子バルブロ率いる軍勢によるカルネ村襲撃の際に、エンリが藁にも縋る思いで召喚したゴブリン軍団の面々からそう呼ばれている。

最初は抵抗のあったジュゲム達第一次召喚ゴブリン達が呼ぶ"エンリの姐さん"が一番まともに聞こえるとは不思議だが、人は慣れるものなのだろう。

「エンリ、来たんだね」

倒れている人の傍に座り作業をしていたエンリの夫ンフィーレアが、エンリ達に気づいて顔を上げた。やや肌ツヤが悪いが、そこにエンリは気づいていない。

（真剣な眼差しのンフィもかっこいいなぁ…）

などと考えながら、見つめていたのだ。…これは今夜も激しくなりそうな予感がする。

「エンリ？」

「あ、ごめん。どう、その人？　…人だよね？」

エンリは倒れている人を覗き込む。

「うーん、人だよ。正直かなりボロボロだね。冒険者のようだけど、見たとこ銀級（シルバー）かな。たぶんそうだと思うんだけど、僕が知っているのとは違うから断定は出来ないけどね。気になるのは、ランクに対して装備が貧弱でボロボロな事だけど」

ンフィーレアの脳裏に浮かぶのは、かつてこの村にも同行してもらったことのある冒険者チーム"漆黒の剣"の四人の姿。何年も前

に彼を守ろうとして、命を失った人達。共に過ごした時間は短いが、彼は死ぬまで彼等をずっと忘れないだろう。
　目の前に倒れている冒険者らしき人物は、彼らと同じクラスのはずだが、身につけている装備は中途半端な長さの剣と、小型の円盾。使い込まれた鎖帷子の上に薄汚れた革鎧。被っているのは、顔まで隠している鉄の兜だ。どう贔屓目にみても、あまり上等そうな物には見えない。駆け出しの銅級（カッパー）でももっとマシな装備をしている気がしなくもない。
　汚れ方と、血の臭いがする事から考えると実戦経験は積んでいると思われるのだが、色々と釣り合わない気もする。この村のゴブリン達の方が良い装備をしているかもしれない。
「とりあえず、ゴブリンさん達に回復魔法をかけてもらってるから、傷は塞がっているよ。それにゴウン様・・魔導王陛下にいただいた疲労を回復するポーションも投与したから・・、心配はいらないだろうね。そのうち意識を取り戻すと思うよ」
「なんで空から降ってきたのかな？・」
「それはわからないよ。魔導王陛下の配下の方なら、空輸中にドラゴンから落ちたとか・・・いう事も考えられるかもしれないけど、この人はどう贔屓目に見ても・・そうは見えないよね」
　確かにこの村の・・大恩人であり、この辺りを支配する魔導王アインズ・ウール・ゴウンの配下とは思えなかった。
「私もこんな奴は見たことないっすよ！・」
　赤毛のメイド服の女性が突如エンリとンフィーレアの間に姿を現した。その顔立ちは人目を引く美しさを持つ、言い古された言葉を使うならば、絶世の美女となるのだろう。
　彼女はルプスレギナ・ベータ。アインズ・ウール・ゴウンに仕える戦闘メイドの一人であり、カルネ村の守護を任されている。
「ルプスレギナさん、こんにちは」
「ちわっす！」
　いつものように天真爛漫な笑顔で気軽に挨拶してくる。毎回のように突然現れるので、最初の頃はエンリも毎回飛び跳ねたり、心臓が

止まるかと思うほど、驚きびっくりしていたものだが、次第に慣れてきて最近ではすっかり平然と出迎えられる。何となくだが、今のエンリには彼女が出てくるタイミングがかなりの確率でわかるのだ。
「最近エンちゃん驚いてくれなくなったッスね。お姉さん、ちょっとだけつまらないッス。もしかしてンフィちゃんに汚されちゃいました？　ぷぷぷっ」
「ちょっ、ルプスレギナさん！」
　さらっととんでもない事を言い出す赤毛メイドに慌てて抗議の声を上げるエンリ。
「冗談ッスよ。軽い挨拶代わりのジョークってやつッスね。それにンフィちゃんは未だに驚いてくれる純な男の子っスから、むしろ逆じゃないっすかね？」
　つまりは、エンリがンフィーレアを……。
「ルプスレギナさんっ！」
「あはははは、ちょっとからかっただけッスよー。そんなに怖い顔しないで欲しいっス。私とエンちゃんの仲じゃないッスかぁ」
　どんな仲だよっ！　っとその場にいる全員が思ったが口には出さない。真面目に相手しても無駄だという事は経験上わかっているのだから。
「んで、コレがエンちゃんの新しい男ッスか？　まるでボロ雑巾ッスけど、それなりに鍛えてそうッスね。まあ、ンフィちゃんよりは逞しいけど、趣味悪くないッスかね？」
　誰も知らない事だが、この降ってきた男は実はモテ男だったりするのだが、確かに今はそう見えないだろう。
「どうしてそうなるんですかっ！」
　エンリの抗議の声を無視して、ルプスレギナは、まるで小石でも拾うように片手で倒れていた男をヒョイッと摘み上げ、キョロキョロと辺りを見回してからエンリに問いかけた。
「で、どこに運ぶつもりっスか？」
　確かにこのままにはしておけないが、とはいえこの村に宿泊施設などない。そうなってくると選択肢は限られてくる。

「もう！　ンフィ、いいよね？」
「ああ、構わないよ」
　確認をとった後、エンリが指差したのは自らの家だった。
「了解！　そんじゃあ、とりあえずは運んであげるッスけど、その後は任せるッスよ」
　ルプスレギナは、鼻歌を歌いながらブンブンと振り回しながら運んでいき、エンリの家にある夫婦の寝室とは別の階にある来客用のベッドに男を寝かせてくれた。やり方はともかく手伝ってくれた事は確かなので、エンリは礼を言いルプスレギナは姿を消した。
「ジュゲムさん、手伝ってもらえるかい？」
「おやすい御用ですぜ、兄さん」
　ンフィーレアとジュゲムは手早く男の装備を剥ぎ取る……いや、外させてベッドに寝かせた。
「これで大丈夫かな。それにしてもこの鎖帷子ボロボロだなぁ……」
「というよりは、全般的にじゃないですかね？　皮鎧はわざと汚しているように見えますが、剣も刃こぼれがありますし、小ぶりな円盾もだいぶ傷んでますぜ。戦闘直後って感じですねぇ」
「銀級（シルバー）にしては装備にはお金かかってない感じだからね。理由はわからないけど。とりあえず装備はドワーフさん達に相談してみようか」
　それからそれほどかからずにドワーフは装備を修繕して持ってきてくれたが、未だに男は目覚めない。

「ンフィー、どう？」
「ああ、まだ目が覚めないみたいだね。傷は全快してるんだけど、かなりのダメージを受けてたみたいだから。それに悪い夢を見てるみたいでかなり魘されてるね。さすがにそういうのに効くポーションはないからなぁ。悪い夢を見ないポーション……意外と売れそうな気もする……」
「どうせなら、いい夢を見るポーションの方が売れそうだけどね」
　エンリの発言に、ンフィーレアは目を見開くと、愛する妻の両肩をガッシと掴んだ。

「それだよ！　いいよ、それ！　よーし、ゴウン様に提案してみるよ」
「ねえ、ンフィ。提案するのは素晴らしい事だと思うの……」
興奮する夫に対し、エンリは歯切れが悪い。
「え、なにか気になるの？　もし、そうなら言ってよエンリ」
ナイスアイディアだと思っていたンフィーレアだが、妻の様子を見て不安になる。
「う、うん。えっとね……内容は良いかなって思うの」
「うん、なら……」
「でもね……ゴウン様……魔導王陛下は……夢見るのかなぁ……って」
「あっ……」
二人の間に沈黙が流れた。

第2話

そして、夜が明けた。
陽の光が優しく窓から差し込み気温が徐々に上がり始める。どのような世界でも太陽は恵みだ。植物は太陽に向かって、陽の光を求めて伸びていき、やがて大輪の花を咲かせるものだ。
朝だけに咲く花達はゆっくりと開いていく。それを待っていたかのように眠りについていた動物達も陽の光に反応して起き出す。そして一番鶏が鳴き、朝の訪れを村に告げた。
「カルネ村の朝だぞい」とでも言いたげにその鳴き声は村中に響いていく。

「う、うおっ！」
ここで、ようやく昨日空から降ってきた男――当の本人はその事を知らないが――は目を覚ました。いや、気がついたというべきだろうか。
「どこだ・・・」
男は体を起こし、注意深く様子を探る。目で情報を探りながら手で体の様子を確かめる。
「なにが・・」
ここが何処かはわからないが、部屋の中である事は間違いない。宿屋ではなく一般の住居の一室だろう。装飾や壁の造りなどから、大きな都市ではなく小さな街か村と思われた。
装備品を身につけていない事は当然すぐにわかったし、それがベッドからやや離れた入口付近にある腰くらいの高さの棚の上に置いてある事を確認し、少し安心する。欠けているものはないようだ。
体の方は、傷や痛みはない。不思議な事にいつもより軽く感じるほど体の調子はいいようだ。体の心配より先に装備を確認してしまうのは、彼がいかに奴らを警戒しているのかわかるだろう。
「何か来るな」

彼は戦士でありながら探索能力に長けている。足音は一つ。歩幅と歩くペースからして、まず奴らではないが、いつでも動けるようにしておく。そう素早く武器を取れるように。
やがてガチャっと音がして栗毛色の髪を三つ編みにした若い女が入ってきた。体を起こしている彼に気づくと廊下へ向かって声を上げた。
「ンフィー、目が覚めたみたいよー！」
その声に素早く反応しドタドタと走ってくる足音が聞こえた。
「エンリ、目が覚めたって？」
飛び込んで来たのは、金髪で顔の半分が隠れているが、人の良さそうな、やや華奢な印象を受ける少年だった。
「うん。空から降ってきた人、目が覚めたみたい」
「あ、本当だ。空から降ってきた人、気がついたんだね」
この男女の会話で、彼は何となく状況を理解する。
（降って来た？　俺がか？）
どうやら彼は、空から降ってきたという事らしい。だが、なぜそうなったかはわからない。彼の記憶は、仲間とゴブリン退治をしていた際に、不意を打たれて穴に落ちそうになった仲間の妖精弓手を庇って、入れ替わるようにその穴に落ちたというところで途切れているのだ。
「僕はンフィーレアと言います。それとこちらが僕の妻で」
「このカルネ村の村長で、エンリです」
自分よりも歳若い少年少女かと思えば、実は若夫婦だったようだ。しかも女性の方が村長だというのは意表を突かれた。そして彼は、首を傾げた。何しろカルネ村という村に心当たりがないのだ。
「俺は、ゴ・・」
まずは彼が名乗ろうと口を開きかけた時、驚くべき事が起きた。あってはならないことであり、彼が常に恐れていること。
「エンリの姐さん、ンフィーレアの兄さん、遅れてすみません！」
流暢な言葉で挨拶をしながら、なんとゴブリンが三体ほど部屋に飛び込んできたのだ。

「ゴブリン!?」
彼は素早い反応を見せた。ベッドから飛び下りると、素早く置いてあった剣と盾を掴み取り、ンフィーレアとエンリを庇うように身構えた。
彼は人呼んで"ゴブリンスレイヤー"――ゴブリンを殺す者――もっとも本人も自分自身でそう名乗ってもいるのだが。
辺境の街で冒険者となり、最下級モンスターとされるゴブリンのみを退治して、野良で最高峰となる銀等級にまで上り詰めた変わり種である。だが、その事をこの場にいる彼以外の者は知らない。
「下がれ！」
彼はそう言って油断なく剣を向ける。鎧兜を着ていない以上、防御に関してはかなり心もとない。
（三体程度は相手に出来るかもしれないが、防具なしの上に守りながらは難しいかもしれん）　この人の良さそうな若村長夫妻を守りながら戦うのは難しいだろう。それにこんな家中にまでゴブリンが出たのだ。この村の被害はかなりのものと思われた。
（なんだ・様子がおかしいな・それに見た事のないタイプだ。最初の奴はボブゴブリンか？　いや違う気がする。後の二体はゴブリンシャーマンか？　雰囲気が違うが）
入ってきたゴブリンは、彼の知るゴブリンとは違う。一体は歴戦の戦士という雰囲気を醸しだしていたし体もパンプアップされているが。背は高くない。彼の知る中だとボブゴブリンに近いが違う気がする。名付けるならゴブリン戦士（ファイター）だろうか。
一体は羽扇を持ち髭を生やしている。頭が良さそうな印象がある。
（頭が良いゴブリンは危険すぎる。真っ先に殺るべきだが・）
背中を冷たい汗が流れる。ただ頭が良いだけではないと思われた。
（シャーマンというよりは、神官・なんの冗談だ）
最後の一体は何となくだが、神官のように思えた
（手強く、油断のならない相手・いやそれ以上か？）
彼はそう判断している。戦士や神官には勝てるかもしれないが、羽扇を持ったゴブリンの力は底知れない。いや、ハッキリ言えば勝てる

気がしない。
「あのー大丈夫ですよ。このゴブリンさん達は人を襲ったりしませんから」
「この反応が普通なんだろうな。この人、もしかしたら魔導国の人じゃないのかもしれないよ、エンリ」
「あ、そうか。そうかもね」
「とにかく落ち着いて。ここはカルネ村と言って、人間とゴブリン、それにオーガやドワーフも一緒に暮らす平和な村ですよ」
　村長夫婦はそう言うが、人を襲わないゴブリンなど彼の常識にはない。
　彼の知る限りゴブリンは、人間を襲い男は殺し、女は犯し攫い孕ませ、仲間を産む孕み袋にし気まぐれに殺す。そんな存在であり、人と共存など有り得ない、有り得るはずがない。忌むべき存在だ。
　彼の視点から見れば、ゴブリンという種族は、大人から赤子に至るまで一体たりとも残さずに滅するべき存在である。
「エンリの姐さんや、兄さんの言う通りですぜ。・・お客人がいた場所では違うかもしれやせんが、このカルネ村・・そして・・アインズ・ウール・ゴウン魔導国においてゴブリンが人を襲う・事はないですぜ。そもそも俺らは姐さんの部下として生み出された存在ですし。まあ、お客人がエンリの姐さんやンフィーレアの兄さんに危害を加えるってんなら、勿論一切容赦はしませんけどね。ああ、言い忘れてやしたね。俺はジュゲムってもんです。エンリの姐さんの一の子分でさぁ」
　最後の"エンリの姐さんの一の子分"を強調し胸を張る。人間並に流暢な言葉であり、敵意は確かに感じられない。
（部下？　生み出した？　どういう意味だ？）
　彼にはやはりこの状況が完全には理解が出来なかった。無理もないカルネ村はかなり異色の存在なのだから。
「ホッホッホ。まあ理解出来ないのも無理はありますまい。最近は理解する国や人が増えたとはいえ、ゴブリンが過去に人を襲っていたのは事実ではありますし。まあ、立場を変えれば人が彼らを襲うとも見えますが。ああ、私はゴブリン軍師と申します。エンリ将軍閣下に忠

誠を誓っております。断言いたしましょう。少なくともこのカルネ村に貴方を襲うゴブリンはおりませんよ。ご安心めされよ」
軍師と名乗るだけあり、高い知性を持つ事がこの会話からも感じられた。
（ゴブリン軍師!? 初めて聞く。エンリ将軍？ この女性がゴブリンの指揮官なのか？ 村長ではないのか？ どういう事だ？）
これは、あまりにも彼の常識とかけ離れた状況だった。
「傷の具合はどうですかな？」
尋ねてきたのは神官のようなゴブリンだった。ゴブリン神官とは考えたくもない存在だ。
（まさか、ゴブリンが俺を？）
戸惑いがさらに増すが、答えないわけにもいかないだろう。
「問題ない」
「それは重畳」
なぜか軍師が代わりに満足そうに重々しく頷いている。治療をしてくれたのは神官と確信した。
「奇跡を使えるのか？」
彼の仲間の女神官は〈小癒（ヒール）〉という奇跡。魔法のようなものを使う事ができる。特徴としては一日の回数制限が数回と少ない事だろうか。
「奇跡？ 位階魔法の事ですかな。将軍閣下の配下である我らなら当たり前の事です」
軍師の様子を見るに本当の事なのだろう。それよりも先程から、ずっとゴブリンと穏やかに話をしている自分に内心笑ってしまう。
（そんな事があるのか。しかし彼等に敵意はない。ここは敵意を解きつつ警戒しておくか）
彼は剣を下ろし鞘に戻した。
「すまなかった。治療有難く思う。世話をかけた」
「わかっていただければいいんですよ。冒険者の方にとってゴブリンは倒すべき相手ってのは知っていますし」
ジュゲムは気にしていないようだ。その様子は人間味があり、まる

で人と話しているかのようだった。どう見てもゴブリンのはずだが。
（それにしても出来たゴブリンだ。いや、本当にゴブリンなのか？
人が化けているとか？　いや、ありえないか。それにしても位階魔法とはなんだ？　奇跡を知らないようだし、わけがわからん）
サイズはゴブリンサイズであり、人が化けるとは思えない。それなら子供が化けていることになるが、明らかに話した感じは大人と思えた。
「ところで、お名前は？」
村長であり将軍閣下であるらしい女性から尋ねられた。片方が名乗っているのだから、名乗らない訳にはいかない。
（いつもならゴブリンスレイヤーと名乗るところだが、どうすべきか）
まさかそのまま名乗るわけにはいかないだろうが、もう長い事それで通している。
（ゴブリンスレイヤー・かみきり丸・小鬼殺し・オルクボルグ・）
彼の仲間からの呼び名が浮かび、結論に至る。
「オルク・オルク・ボルグだ」
仲間の妖精弓手がそう呼んでいる。エルフ達の言葉でゴブリンスレイヤーの事を指すらしい。
「よろしくオルク・ボルグさん。ようこそカルネ村へ」
村長は笑顔でそう言ってくれた。
「ああ」
ぶっきらぼうにそう答えたオルク・ボルグことゴブリンスレイヤーは、ふと気になる事を聞いてみた。
「・ゴブリンはどれくらいいるんだ？」
「５０００人ちょいだったかなー」
予想の超える衝撃的な答えだった。

第3話

最初、彼は言われた言葉の意味がわからなかった。まったく予想もしない信じ難い答え。落ち着いてもう一度言われた言葉を頭の中で復唱してみて、その言葉の意味を理解する。今とんでもないことをサラリと言われたのだと。

「・・ゴブリンが５０００以上？」

・・なんとか喘ぐように声を絞り出す。有り得ない・・・有り得てはいけない。とてもではないが、すぐには信じられない事・・だった。

もし本当にゴブリンが５０００もいたのなら、村や街などではとても対抗出来まい。鎧袖一触、あっという間に廃村、廃墟が出来上がるだろう。

それどころか都市すら陥落するだろうし、もしかしたら国家ですら滅びるレベルかもしれない。

それを束ねる長ともなれば、彼が今までに出会ったどんなゴブリンをも超えるに違いない。小鬼王（ゴブリンロード）を超えるとなれば、ゴブリン皇帝か、はたまた神にも悪魔にもなれるような存在か。

（神はないな）

神はゴブリンスレイヤー達に祝福を与える味方の存在。ゴブリン達は祝福を受ける存在ではない。敵となるとやはり魔神か。ふと魔神皇帝という言葉が浮かぶが、そんな存在が実在するのかは知らない。

いったいどれだけの人間が殺され、女性達が犯され、泣き叫ぶ子供達が出るだろうか。いや、生き延びる者なとはいないかもしれない。

ゴブリンスレイヤーの脳裏に、知り合いの顔が次々に浮かぶ。辺境の街の組合の受付嬢の笑顔、冒険者達、街の皆、仲間の女神官、妖精弓手、蜥蜴僧侶、鉱人道士達の笑い声。そして最後に浮かぶのは牧場で彼の帰りを待っている幼馴染の笑顔。守りたい者達が消えていく光景を思い浮かべてしまう。

きっと彼が仲間に"５０００を超えるゴブリンがいる場所がある"と告げたら、その顔は引き攣るどころか間違いなく凍りつくだろ

う。討伐することは不可能に近い。
　彼の幼馴染が住む牧場を守る為に、辺境の街を根城にする多数の冒険者の力を借りた事があるが、その時でも相手は百を超える程度だ。それでも冒険者側に犠牲が出ている。５０００を超えるゴブリン軍団など悪夢でしかない。しかもそれが村で暮らしているなどと告げても信じてくれないだろう。その村にいる自分だってそうなのだから。
「全てエンリ将軍閣下に忠誠を誓った者達です。オルク・ボルグ殿ご安心を」
　この軍師の言葉に嘘はないのはわかる。少なくともここにいる三体のゴブリンが、将軍閣下と仰ぐ女村長へ忠誠を誓っているのは間違いがないように思えた。どう見てもただの村娘にしか見えないのだが、この若さで村長だ、将軍閣下だとか言われているのだ。見た目ではわからない何かがあるのは間違いない。
「安心していいよ。この村にいるゴブリンさん達は、ほとんどがアインズ・ウール・ゴウン魔導王陛下にいただいたアイテムで、エンリが召喚したものだからね」
▪村長の夫は笑顔でそう教えてくれた。だが、気になる部分がある。
（▪ゴブリンを召喚だと？　正気か？　）
▪彼のいた場所で、ゴブリンを召喚するような、そんな存在がいたとすれば間違いなく悪である。悪でしかない。ふと魔神王や魔神将という存在が脳裏に浮かぶが、目の前にいる村長はとてもそうは見えない。どう見ても普通の村娘としか思えない。もちろん魔神皇帝でもないだろう。
「そうか」
　受け入れ難い状況に、返す言葉が見つからずいつも以上にぶっきらぼうに答えてしまった。
「そうだ、ご飯にしましょうか。オルク・ボルグさんもお腹空いたでしょう？」
　言われてみたら空腹を感じる。どれくらい寝ていたかはわからな

いが、最後に食事をとってからは、かなりの時間が過ぎているのは間違いない。何をするにしても食事は必要だろう。
「ああ」
「じゃあ着替えは置いてあるから、着替えたら食堂へ来てくださいね」
村長達はそう言って部屋を出ていく。そして、彼はふーっと息を吐き出した。
「着替えか……」
彼は普段は街中でも鎧を着込み、兜を被ったまま食事をとるのだが、さすがにあの村長夫婦の前では躊躇われる。普段はゴブリンの不意打ちに備えているのだが、ここのゴブリンは大丈夫な気がした。そして、そんな自分に苛立ちを感じる。
(チッ、ゴブリンを信じるというのか。有り得ない話だが、そもそも今の状況の方が有り得ないな)
実際襲うつもりならとっくに出来ていたし、そもそも治癒などしないだろう。そこは評価できるし、彼のゴブリンスレイヤー――ゴブリンを殺す者――としての経験からも敵対者ではないと判断はできる。気持ちとしては複雑なのだが、心情と判断は別物だ。
それに本当に５０００以上いるのなら、刺激することは避けたかった。さすがにこの戦力差は経験や知識でカバーできる範囲ではない。
悩んだ挙句、帯剣し鎖帷子までは着込む事にする。無防備すぎるのも問題だろう。兜は念の為脇に抱えて、彼は扉を開けた。
魔窟に入るような気持ちで。

◇◆◇

食事は滞りなく無事何事もなく終わり、現在オクル・ボルグを名乗るゴブリンスレイヤーは、兜までフル装備の上で、村長夫妻とともに村を巡回している。
巡回と言ったが、実際には村の案内を兼ねた食後の散歩といったのんびりしたものだ。もっとも彼は気楽とは真逆な思いだったが。ゴ

ブリンが多数闊歩する村を気楽に歩けるわけがない。
しかも得体の知れない人物であるゴブリンスレイヤーを警戒してだろう。数人の屈強なゴブリンが村長夫妻の護衛についていた。
そのうちの一人が、先程も姿を見たジュゲムという名のゴブリンだ。その背には魔法の剣らしきものを背負っている。
「立派な剣だ」
感想を言ってみたら、村を襲ってきたトロールが持っていた剣だという。撃退後に、村長から隊長であるジュゲムに授けられたという話だった。
（ゴブリンに魔法の剣を与えるとは。俺は奪われてもいい剣にしているというのにな）
彼は自分が倒された時を常に考えている。だから、奪われても脅威にならない程度の装備しか身につけていない。主武器である中途半端な長さの剣は、武器屋に"ゴブリン退治くらいにしか使えない"と言われた程度の代物であり、奪われてもゴブリンの強化には繋がらない。
この剣の長さが半端なのは、狭いゴブリンの巣穴で振る事を前提にしているからだ。普通の剣の長さでは天井や壁に当たってしまい衝撃で武器を失う可能性がある。ゴブリンが多数いる巣穴で武器を失うという事が、どういう事になるかは想像がつくだろう。
実際問題として新人冒険者が、油断から武器を失い死亡する例はあるのだから。
実用性重視（ゴブリン殺し）かつ、奪われても大丈夫な程度にしている為に、野良で最高ランクの銀等級冒険者にしてはかなり劣る装備であり、よくそれで同業者から軽く見られていたものだ。彼は気にしていなかったが。
それにして、もしここにいるゴブリンが悪しき存在だったら国など簡単に滅ぶだろう。
ゴブリンスレイヤーは、ここが自分がいた国ではなく、それどころか自分が知る世界ではない不思議な場所にいるような気がしてしまう。実際それは正解だろう。
（ゴブリンを数えきれないくらいに殺してきた俺に、平和なゴブリン

を見せるか・・・）

そして、ジュゲムだけではなく、一緒にいる聖騎士隊だというゴブリン。身につけている装備は立派だ。ただ、ゴブリンスレイヤーからすれば、ゴブリンの聖騎士というのが有り得ない話だった。神に仕えるゴブリンなどいてはいけない。

（・・笑えない冗談だ）

・・ゴブリンは奪う存在だというのが認識としてある。そもそも彼がゴブリンスレイヤーとなったのは、彼が奪われた側の人間からだ。彼の姉はゴブリンに殺された。そんなゴブリンに聖騎士や神官がいるのは有り得ないのだ。

この村も奪われた側だったと、村長の話からはわかっている。この村は、ゴブリンではなく、人に襲われ人に奪われた。そして、ゴブリンとともに戦い絆を深めたという。

なるほどと、彼は思う。前提条件がまったく異なるのだから対応差は仕方ないだろう。もっとも、村人の若い女性がゴブリンと親しげに話していたり、一緒に食事をしたりしている光景の方は、やはり彼にとっては有り得ない話であることに変わりはなかったが。

そんな中で、一人の少女がゴブリン達と遊んでいる事に気づく。

（頭がおかしくなりそうだ）

ゴブリンはゴブリンでも、彼の知るゴブリンとはもはや別物と言ってもよいだろう。独自の進化を遂げたゴブリンなのかもしれない。

（それにしても、人の数が少ないな）

先程から感じていたが、あまりにもゴブリンが多く、最早ゴブリンの村で人が暮らしているようなそんな気にすらなってしまう。

村長夫妻に聞けば、この村の人間は最近移住した人を含めても２００に届くかどうかという事らしい。他にはオーガや、魔導王陛下の頼みで受け入れたドワーフ達がいるそうだが、大半はゴブリンが住民との事。

魔導国の首都であるエ・ランテルは、もっと多くの種族が平和に暮らす理想郷だという話だ。ドラゴンや、巨人族などもそこにはおり、

ドラゴンが荷物を空輸し、巨人族が都市の清掃などを行っているらしい。
「信じられん」
彼はそう声をもらすのが精一杯だった。強大なドラゴンですら支配下であるならば、ゴブリンが従順なのも頷ける話だ。
村長夫妻から何度も名前が出るアインズ・ウール・ゴウン魔導王陛下。
（もしあの時に魔導王とやらがいてくれたら姉は……）
たられば な話だが、ゴブリンと楽しそうに戯れる少女を見たらそんな思いにとらわれてしまうのは仕方ないだろう。
もし、この国で暮らしていたら姉は生きていたのではないかとも考えてしまうのだ。
「詮無き事だな」
兜の中でボソリと独り言ちるゴブリンスレイヤーであった。

第４話

ゴブリンを憎み、ゴブリンを殺す事だけを考えてそれを実行し続けている男。それが彼である。

彼はゴブリンを殺す依頼だけをこなし、その功績だけで野良の冒険者で、最高ランクの銀等級冒険者となった。

この上には、金等級、白金等級があるのだが、それは国から認められるようなものである。一般の・野良の冒険者の最高ランクはあくまで銀等級だ。

そんな彼を人はゴブリンスレイヤーと呼び、そして自らもそう名乗っていた。辺境の街でひたすらゴブリンを狩り続ける彼の冒険譚を吟遊詩人達が各地で広めているため、その名は広範囲に渡って知られている。

彼をゴブリンスレイヤーではない呼び名で呼ぶのは、仲間の妖精弓手が"オルクボルグ"、鉱人道士(ドワーフ)が"かみきり丸"、蜥蜴僧侶が"小鬼殺し殿"と呼ぶくらいだが、それぞれゴブリンスレイヤーを意味する言葉である。

ちなみに唯一幼馴染の牛飼娘だけが、「君」と言う言い方をする。

「またか・・」

彼女が住む牧場で目覚める夢を見て、まったく違う場所で目を覚ますのがここ数日のパターンになっている。

「そうか・・」

いつかまた戻れる時は来るのか。そんな不安とともに起き出す。

「おはようございます。お客人」

「ああ」

彼に挨拶をしてきたのは、ゴブリン。あれだけ憎んできた相手に朝の挨拶をされる。未だに慣れる事は出来ないが、ここはそういう場所だと理解はしているが、だからといってゴブリンへの感情が消せるわけではない。

ゴブリンスレイヤーは、今ゴブリンが５０００以上暮らしている村にいるのだ。彼が知るゴブリンとはまったく違うゴブリン達に戸惑

うも、国が変わればそういうものかもしれないと割り切って村に滞在していた。

それにたとえ敵対したところで、多勢に無勢。勝ち目はない。もしかしたら、今後に繋がる新しい戦術に気づくかもと観察は続けているが、今のところ彼の目には普通に暮らすゴブリンとしか見えない。なお、ここで言う普通に暮らすとは、ゴブリンらしい暮らしではなく、人間のような普通の暮らしという意味だ。

「この国では、いや正確には周辺国家であるバハルス帝国、リ・エスティーゼ王国、ローブル聖王国などでも共通ですが、冒険者のランクは銅級（カッパー）から始まり、鉄級（アイアン）、銀級（シルバー）、金級（ゴールド）、白金級（プラチナ）、ミスリル、オリハルコン、アダマンタイトですね」

村長の夫はゴブリンスレイヤーの質問に対しそうスラスラと答えてくれた。以前は冒険者に依頼をする事も多かったとの事で、冒険者には詳しいらしい。

（銀等級が下から三番目とは…）

軽いカルチャーショックを感じる。細かい話だが、同じ銀でもゴブリンスレイヤーは銀等級、この国では銀級らしい。このあたりに文化の差が出ている。

結局、元の場所に戻る方法も術も分からず、残して来た仲間を気にしながらここでもう一週間以上過ごしている。

（平和だな…）

周囲をゴブリンに囲まれながら平和に過ごしていたなどと、仲間に告げたらなんと言われるだろうか。

（違う。彼らは俺の知るゴブリンとは違うのだ。それにしても…ここは何処なのだろうか）

近い文化の違う国とはわかるが、村長の夫から聞いた話では周辺国家の名前は、ゴブリンスレイヤーにとって、未知の名前ばかりだった。

（俺がゴブリンに囲まれてのんびりかまえている間にも、誰かがゴブリンの被害を受けているかもしれん…）

カンカンカンカン！　カンカンカンカン！　と鐘の音がする。

こんな時間に高らかに鳴らすという事は明らかに警報だろう。彼は素早く装備を確認すると部屋を飛び出し、表へと出た。村の裏手側にあるトブの大森林側にある物見櫓からその音はしていた。
「不審な影多数！　対応せよ！」
聞いた話だが、この村は他国の人間に襲われた事があり、その後トロール達に襲われたが、村民の自警団と村長率いるゴブリン――当時は２０に満たない程度だったそうだが――の活躍もあり撃退したそうだ。さらには同じ国の人間からも襲われたことがあるが、今いるゴブリンの大半がその時にかけつけ撃退したという。
（なるほど、人に襲われゴブリンと共に戦う。そんな経験を二度もしていれば、こうもなるか。きっと村人にとっては人よりも戦友たるゴブリンやオーガの方が信用できる存在なのだろうな）
今度は何が襲ってきたのだろうか。
「敵か？」
ゴブリンスレイヤーは、女村長に声をかける。
「詳しい事はわかりませんが、そのようですね」
女村長エンリは、まったく動じる様子はなかった。
「エンリ、敵は亜人らしい。数は１００程度」
村長の夫ンフィーレアは多少緊張はあるようだが、ゆとりがあった。
「１００？　問題になりませんな」
羽扇を持ったゴブリン軍師は、些事であるといいたげだった。
「相手は１００。どうやらアインズ・ウール・ゴウン魔導王陛下の支配を認めない連中で、支配下にしたければ、力を示せという意向らしいね」
ンフィーレアの言葉に集まっていた村人やドワーフから非難の声が上がる。
要約すれば、"あの素晴らしい魔導王陛下の支配を受け入れないなんて、馬鹿だ、阿呆だ、死んでしまえ" という事。
「叩き潰しましょう！　でも陛下は何と言うかしら？」
憤怒を隠さなかったのは村長エンリも同じであるが、最後にふと冷

静になり踏み止まる。
「それなら叩き潰しておっけーだそうッスよ!!」
例によって突然姿を現したのは、赤毛のメイド、ルプスレギナである。
「おおっ？」
ゴブリンスレイヤーだけが、驚いて仰け反っているか、他の面々のリアクションは薄い。唯一赤い帽子の醜悪な顔のゴブリンが村長エンリを守る位置に移動したくらいだろうか。
「おんやぁ？　リアクション薄いッスね。つまらないなぁ…」
「…絶対出てくると皆思ってましたよ。ルプスレギナさん」
…ニッコリとエンリが微笑む。
「かーっ、エンちゃんも成長したッスねぇ。お姉さん驚いたッス。ンフィーちゃんと毎夜仲良くしてるからっスかね？」
頭をかきながらニヤニヤとした笑みを浮かべている。
「ルプスレギナさんっ！」
「嫌だなぁ、冗談ッスよぉ。まあ、そうやって真っ赤になってプリプリしているエンちゃんと、反応に困っているンフィーちゃん。二人とも可愛いッスよ！」
二人のやり取りを見る限りは仲良しの知り合いに見える。
（何者だ？　この赤毛のメイドは）
初めて見るゴブリンスレイヤーからすれば、警戒すべき相手に見えた。気を張っている彼がまったく検知出来ずいきなり目の前に現れた。かなり高度な隠密技術を持つのは間違いないし、得体の知れなさが警報を鳴らしていた。見たところ人間のようだが、赤い帽子のゴブリンを初めて見た時以上に危険だと感じている。
「ルプスレギナさん、叩き潰していいのですね？」
村長エンリは真面目な顔で問いかけた。
「構わないっす。なんなら捕まえて腕折ったりして楽しんでもいいっすよ」
そんな趣味はエンリ達にはない。
「陛下が了承されているのであれば、迎撃しましょう。……軍師さん、作

戦をお願いします」
　これは以前ならば隊長のジュゲムの役目だったのだが、今その役目は５０００人のゴブリン軍団をまとめるゴブリン軍師に移っている。村長の指名に軍師は一礼してから、意見を述べ始めた。
「承知致しました。将軍閣下のために手を尽くしましょう。詳細不明の亜人集団が１００。皆が手柄を立てたいとは思っているでしょうが、ここは直接刃を合わせる必要もありますまい。魔法支援団の〈火球（ファイアーボール）〉と長弓兵団の一斉射撃で余裕でしょうな」
　村に近寄らせないで終わらせる。一番味方に被害が出ない方法と言えるだろう。もっとも、この村にいるゴブリン達のレベルからすれば、直接戦闘したところでやられるはずもないのだが。

「後ろは森だ。火は避けろ」
　ゴブリンスレイヤーは感情を込めずにそう述べた。
「確かに。恵みである森を燃やすわけにはいかないよ」
「そうね。軍師さん、火系統や爆発など燃える魔法はなしで、それ以外魔法でお願いします」
　村長夫妻の決により、方針は定められた。
「承知いたしました。それでは、それ以外の魔法と弓による一斉射の後に切り込み隊を編成し残敵の掃討をいたします」
　その後軍師は素早く指示を飛ばし、あっという間に迎撃陣を組む。
「こりゃ俺らには出番ないですぜ」
　ジュゲムは残念そうな声であったが、表情は誇らしげだった。

最終話

「見事だ」

物見櫓に立ったゴブリンスレイヤーは思わずそう呟いてしまう。そして、その事に気づき苦笑する。

（これがゴブリンの戦術でなければ、もっとよかったのだが）

眼下には、あのゴブリン軍師の采配のもとにゴブリン達が展開していた。

まずは敵に対する盾役として、ゴブリン重装甲歩兵団を配置している。兵団のゴブリンと一騎打ちしたとしても倒せないような雰囲気があったが、それが多数。その重厚さは盾というよりも城壁に守られている気がする。味方側から見ているゴブリンスレイヤーからしても鉄壁とすら思える安心感がある。

（これを突破するには、何か爆破できるようなものが必要か。だが、ただ爆破してもビクともしない気がするな）

思わず攻略方法を考えてしまう。長年の習慣だから仕方ないだろう。

（少なくとも、同数以上いないと話にならないな。）

その鉄壁の裏側には、ゴブリン長弓兵団がただ待機しているだけなのに練度の高さを感じさせている。全員が同じ姿勢で同じ角度に弓を揃えて持っていた。

（妖精弓手が見たらどう思うだろうか）

しばらく会えていない仲間の顔が脳裏に浮かぶ。ゴブリンと弓談義などすることはないだろうが、弓使いとしての意見は欲しいと思う。

さらにはゴブリン魔法支援団がその後方に控えていた。

（魔法を連発できるという話が本当かはわからないが、本当ならば脅威になる。断じてこのような部隊を作らせてはならないな）

どうやらゴブリンスレイヤーのいた場所とこの村では、魔法の理が違うらしい。彼のいた場所では祝福と呼ばれた魔法を行使できるの

は日に数回にすぎない。仲間の一人である女神官が使える祝福の数は日に三回、四回程度だったか。

そして、出番はないだろうが不測の事態に備えた遊撃部隊としてゴブリン聖騎士隊が控えている。ハッキリ言ってつけいる隙はない。

「まあ、俺の後輩だからな」

隣に立っているジュゲムは村長を守れるポジションをキープしている。人を守るゴブリンというのは価値観の異なる存在だ。

（しかし、もしこの組織だった動きをゴブリン共がしてきたら…）

この村のゴブリンと、彼が知るゴブリンは別物だと判断していても、可能性は拭えない。ゴブリンは学び強くなるのだから。

（やはり、殺すしかない）

決意を新たにするゴブリンスレイヤーであった。

「この村は、アインズ・ウール・ゴウン魔導王陛下に忠誠を捧げる村です。この村を攻撃する事は、魔導王陛下への反逆となります。その覚悟はありますか？」

エンリの声に返ってきたのは、回答ではなく鬨の声であった。亜人達は攻めてくる。彼我の戦力差を考えもしない愚かすぎる行為だ。

「姐さん」

「仕方ないですね。軍師さん！」

「〈魔法の矢（マジックアロー）〉放てっ！」

指示を受けた魔法支援団から無数の光球が放たれ、亜人軍に襲いかかる。

（ゴブリンが奇跡を使うとは…）

仲間の鉱人道士や、蜥蜴僧侶の使う奇跡よりも、威力は数段上に見える。魔法で出来た矢は、あっという間に亜人軍を飲み込んだ。

「放てっ！」

亜人達は、初撃で半壊。半数以上が大地に還っている。そこへ容赦なく追撃弾が放たれた。成果を確かめる事すらせず、さらにゴブリン軍師は次の指示を出した。

「残敵に対し、斉射！」

長弓兵団から正確な射撃が行われ、生き延びていた亜人達を仕留め

ていく。決着はついた。
（見事だ）
自身も弓を扱うゴブリンスレイヤーから見て、射手の腕前は素晴らしいものがある。仲間の妖精弓手と遜色ない。
（ゴブリンでなければ素直に賞賛に値するのだが）
やはり根底にあるゴブリン憎しという気持ちは消えない。
「出番なしか」
控えていたゴブリン聖騎士隊が残念そうに戦場……いや、狩場を見つめていた。
「敵影なし、反応なし。目標消滅」
簡潔な報告が上がる。寄せ手の亜人軍は、わずかな時間で全滅していた。
「なんだったのかしら」
あまりの手応えの無さに拍子抜けした村長エンリは、そう呟いた。
「よく陛下に逆らおうと思ったよね」
村長の夫であるンフィーレアは呆れていた。カルネ村……しかも全力ではない迎撃で全滅する程度の力で、絶対的な力を持つアインズ・ウール・ゴウン魔導国に敵対しようなど、愚の骨頂である。
だが、彼らは知らない。このカルネ村の戦力があれば、バハルス帝国、リ・エスティーゼ王国を村単独で滅ぼす事ができる事を。
もし、援軍として向かえば、ビーストマンに襲われ窮地に陥っている竜王国を救う力がある事を。
だから亜人軍は戦う相手が悪すぎたのだ。もっとも魔導国に逆らった段階で、同情の余地などないのだが。
この戦いを見ていたゴブリンスレイヤーの胸中は穏やかではない。彼が知るゴブリンとは別物だが、彼の知るゴブリンがこのように成長しないとは限らない。この村のように善の側にいればよいが、彼のよく知るあのゴブリン達がこんな力をつけたらと考えてしまうのだ。
どこかで冒険者が見逃した子供ゴブリンが知恵をつけ力をつけて渡りとなり、さらに力をつけ小鬼英雄（ゴブリンチャンピオン）や小鬼王（ゴブリンロード）に成長するのを彼はよく知っているのだから。

（やはり、滅するしかないな）
決意を新たにするゴブリンスレイヤー。彼はこの後、以前よりもよりゴブリンを狩る熱が入る事になるが、それはまた別の話である。
「あの亜人の残骸はこちらで片付けておきます。将軍閣下はお休みになってください」
村長エンリは素直にそれを受け入れた。どうせ自分がやると言っても反対されるのはわかっているのだからと、達観していた。どんどん族長らしく、将軍らしくなっていくエンリ。
「私、ただの村娘のはずなんだけどなぁ。それが村長になって、アーグ達新しく加わったゴブリンやオーガには族長って呼ばれて、村の人までそう呼ぶよう･･･になるし。そして今度は将軍かぁ。次は何になっちゃうんだろう･･･私みたいに急に･･･どんどんたくさんの人の上に立つことになる人なん･･･かいるのかなぁ･･･」
ボソリと呟くエンリ。きっとそ･･･れに共感できるのはただ一人だけだろう。
それはアインズ・ウール・ゴウン魔導王なのだが、その事をエンリが知る由もない。
「人には為すべきこと･･･がある」
「オルク・ボルグさん･･･」
相変わらずぶっきら･･･ぼうで愛想がないが、エンリには優しい人だと分かっている。エンリはゴブリンの表情から感情を読み取る事に長けている。顔を兜で隠していようが、感情の起伏がない声だとしてもエンリの読み取る力が上回る。
「今の立場がお前の為すべきことだろう。力を尽くせばいい」
「ああ、そうだな」
･･･エンリは口真似をして答える。
「･･･そんな言い方はせん」
･･･後ろでンフィーレアが吹き出し、それはエンリへそして、ゴブリンスレイヤーへと伝播し、三人で声を上げて笑う事になる。
そして翌朝、朝早くゴブリンスレイヤーと村長夫妻は、ゴブリンの

護衛とともに昨晩の戦場を巡回する。綺麗に片付けられており、痕跡はほぼない。
「見落としとかはなさそ…あれ？」
何かを発見したンフィーレアが近寄っていく。
「ンフィー、どうしたの？」
パートナーの後を追う。
「エンリの姐さん、ンフィーレアの兄さん。先に行かねえでくだせぇ」
ジュゲムが後を追う。その後をゴブリンスレイヤーは追う。
（何度見ても歴戦の戦士だな）
ジュゲムの背中を見ながらそんな事を考えてしまう。
（単独なら勝てる相手だとは思うが…）
ゴブリンを倒す事を考えるのが習慣になっているからこそ、どうしても倒し方を考えてしまう。
（昨日の長弓兵団はかなり厄介だな。使う弓もいつものゴブリン共が使うものとは違う一級品だ）
考えつつついて行く。そんな彼にはどこかで油断があったのだろう。いつもなら考えられない凡ミスをしてしまう。　本来の彼なら有り得ない事だ。
「なっ！」
「あっ？」
ンフィレア達が左右に別れて覗きこんでいた何かに足を踏み入れてしまったのだ。
「おおっ！」
それは穴。それも底が見えない深い穴だった。両手足を伸ばしてみるが虚しく何もない空間を掴むだけだった。
「うおおおおおっ…」
落ちていく事は止められない。
「そうか…」
是非に及ばず…といった心境で彼は目を瞑った。
「オルク・ボルグさんっ!!」
エンリの声が響くが、ゴブリンスレイヤーからの反応はないまま

だった。

◇◆◇

松明の灯りが目に入る。
「ゴブリンスレイヤーさんっ！」
「オルクボルグ！」
「小鬼殺し殿！」
「おお、目が覚めたか！　かみきり丸！」
いつもの仲間達がゴブリンスレイヤーを出迎えた。みんな笑顔だ。
「戻ったのか」
誰かが、いや全員が頷いている。きっと彼が気づくのを長い事待っていたのだろう。
「いったいどれくらい気を失っていたんだ……」
「半日ってとこかな」
「半日ですね」
妖精弓手と女神官がほぼ同時に答えてくれた。
「そうか」
自分がなぜあんな場所にいたのか、そしてなぜ戻ったのかはわからない。ゴブリンの可能性を知らしめるためか、それとも平和な世界を夢見たのだろうか。
それはわからないが、何故か補修されている兜に気づき、あれは夢ではないのだと思う。
「これは……」
そして……、右手に握りしめているのは、綺麗な石。出かける前に村長の妹から貰った物で、彼女曰く"お守り石"らしい。村を出る前にもゴブリンと楽しそうに遊んでいた姿を見かけたが、それは慣れたもので、それが普通だと思い知らされた。
（となるとあれは夢ではないのか……だが、やる事は変わらない）
不思議な出会いと別れを経験し舞い戻ったゴブリンスレイヤー。

彼のゴブリンスレイヤーとしての日常がまた始まる。
「ゴブリンだ」
受付にいつものように彼は尋ねるだろう。そして討伐に向かうのだ。それが彼の日常だ。カルネ村のような光景はこの国にはない。

◇◆◇

「そうか。穴を確認したが、誰もいなかったというのだな」
「はい。誰かが落ちた形跡もなく、穴の底には足跡一つなかったそうです」
「そうか。惜しい事をしたな」
アインズのコレクター魂が疼くが、今更どうにもならない。
「不思議な事にもう穴は自然と塞がってしまったようです」
「謎のヒビみたいなものか。またヒビを通って何者かが侵入する事もありえるかもしれん。警戒を怠るなよ」
アインズは指示を出す。
「オルクボルグ。確かエルフの言葉で、ゴブリンスレイヤーという意味だったか。次は逃さぬ。まあ、次があればだが。」
アインズの目の中の炎が強く輝いた。